北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

# 幼稚園と小学校との関連についての基礎的研究



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2012-11-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 伊藤, 勝志<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.32150/00003028 |

# 幼稚園と小学校との関連についての基礎的研究

伊　藤　勝　志

本研究は，北海道科学研究費の補助を受けて実施したものである．

## Ⅰ．はじめに

子どもをとりまく環境的条件の中でも，誕生後の比較的短い期間，人生の初期における教育的環境のあり方は，思春期以後のパーソナリティーにも関与する程に，彼らの成長，発達に大きな影響を与えるものであることは，平井他（1977）の長期に亘る臨床的研究などが明確に示すところである．

このような知見は又，核家族化現象をはじめとする様々な社会的要因と相まって，乳幼児，殊に就学前の幼児に対する教育的な関心をさらに高めることに寄与しているとも言われる．特に，学校教育法に基く「学校」の一つとして，幼児を総合的，体系的に教育しようとする幼稚園は，この北海道においてさえ60％の就園率に迫ろうとする程，近年は目ざましい速度で整備されてきた．

幼児期の子どもは，生理的にも心理的にも小学生とは異なった面が多い．こうした特性に沿って，子ども達の自主的，自発的活動性を重視し，遊びを中心としながら教育が行われるのが幼稚園であろう．

幼児の「保育」に対する根本的な考え方，発想はもとより，制度的にも指導者の資質の面でも多くの相異点を有するといわれつつも，保育内容では幼稚園とほぼ同一の保育所なども含め，就学前に集団教育を経験する子どもが90％を越えて久しい今日，これら幼児期の教育とそれに続く小学校教育との間に，内容や方法その他の面で何ら関連をもたないことは，長年にわたって指摘され続けていたところである．

確かに，幼児期の教育はその時期でなければできないことを計画的に実施していくのが望ましいもので，決して小学校の低年齢化，まねごとに終って良しとするものではない．とはいえ，教育は人間の一生涯にわたって系統的におこなわれる，一貫した働きかけである．この意味においては，いかに特徴的な幼児期であるとはいえ，その時期の教育的成果を踏まえることなく小学校教育が進むこと自体，不自然な感を免れない．幼から小への一貫した積み上げがあってこそ，小学校教育においても望ましい効果が期待できるものであろう．

幼稚園と小学校との関連，あるいは一貫教育の実現には，ことばそのものに対する誤解をはじめ，幼・保の問題，指導者の問題など，多くの困難が控えている．とはいえ，幼児期の教育がその本来の意義を失うことなく，小学校教育と何らかの関連を保つことにより，「連続する二つの学校の間に，教育の断層やむだな重複がないよう」にして，その効果を高めることはできないだろうか．

本研究はこのような観点から，幼・小の関連を検討することを通し，現在の幼稚園教育における内容，方法，効果などを別の角度から省み，その充実を目指す意図でおこなわれたもので，伊藤(1980)における調査等をもとに，対象，範囲をさらに拡大して実施された．

## II．幼・小関連についての調査

### 1．調査の目的

幼・小関連の検討を進めるうえで最大の鍵となるのは，制度の問題もさることながら子ども達の教育に直接たずさわる教師達の考えであろう．幼稚園と小学校との関連性については，幼稚園教師の熱心さに比べ小学校教師の冷淡さがこれまでの研究で指摘されている．ここでは，幼・小双方の教師達の意見等を探り，これらの指摘と比較検討することを通して，北海道における傾向を確かめ，次の段階へ進むための基礎的資料を得ることが目的である．

### 2．調査の方法

◎本調査においては，現場の教師達から短期間内にできるだけ多くの意見を聴取する必要上，質問紙調査法を用いた．質問項目は，先行研究をもとにある程度予測される意見を選択肢にまとめ，なお不足な点があれば具体的な記述で補って頂くようにした．質問の内容は次の如く4つに大別される．

①性別・年齢など，記入者の属性に関する項目．
②小学校低学年児の指導・教育内容等に関する項目．
③幼稚園児の指導・教育内容等に関する項目．
④幼稚園と小学校との関連性についての必要性，可能性等に関するもの．

◎調査対象者

北海道内主要9都市にある公立小学校45校で，1，2年生を担任する教師．同じ地域の公･私立幼稚園50園（公立4，私立46）において，学級を担任している教師．

◎調査対象地域が北海道内のほぼ全域にわたる広範なものであるため，質問紙の配布・回収は郵送によった．本小論をまとめるに際しての回収率は，幼稚園が62%，小学校68.8%，全体では64.1%である．なお，有効回答総数は447（幼稚園206，小学校241）に達した．回答者の具体的意見の分析やクロス集計などは次回に譲るとして，ここでは調査の一部についてまとめる．

### 3．調査の結果及びその考察

A．教師の属性に関する項目から

ここでは，幼稚園と小学校（以下，幼・小と略）の教師間で著しい相異があるので，簡単に記しておく．

(1)性別に関して

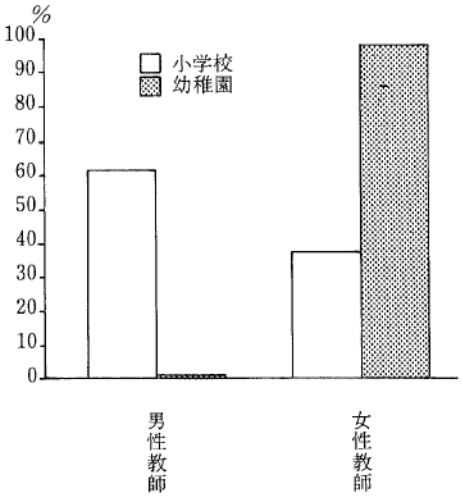
近年，幼稚園にも男性教師の「進出」が増加しているといわれるが，本調査において確かめられたのは，31園中3園，206名の僅か1.4%に過ぎない（図－1参照）．雇用の条件など全く異なる公立学校（男性教師が62%を占める）とは比較にもならないが，パーソナリティーの基礎を形成する

うえでその重要さが繰り返し指摘され，しかも家庭生活の延長線上にある教育の場として，過ぎる程に多様な環境が求められる幼稚園に，男性の教師がほとんど無いにも等しい現状はやはり不自然と言えるのではないか．

(2)年齢及び経験年数

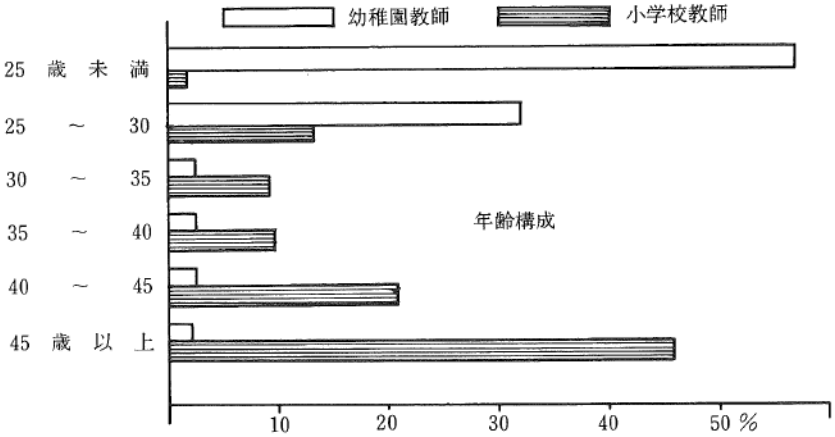
図－2は，幼・小それぞれに所属する教師達の年齢構成を示す．図からも明らかなように，幼稚園と小学校とでは，教師の年齢，経験年数の何れにおいても，全く逆の様相を呈している．30歳未満の教師は1～2年生の担任の僅か14%程度に過ぎないが，幼稚園教諭においては実に88%を越えている．一方，40歳を越える教師は小学校の66%に対し，幼稚園では一割にも達していない．このように対称的な現象が極めて自然な形で，経験年数にも反映しているのであろう（図－3参照）．

様々な遊びを中心とした，動きの激しい活動が多い幼児を相手とするだけに，幼稚園教師の若さはかけがえのないものである．しかし，それと同時に，積年の経験を通して培われる豊かな人間性も又，幼稚園教師に求められる資質であることは，小学校の場合と全く同様である．幼児的心性を完全に脱け切らない低学年の指導に，多くの経験を要することが，小学校教師のこのような年齢構成に現われているのであろう．なお，久米（1979）の調査によると，愛媛県における幼稚園，小学校双方の教師も同様な年齢構成となっているが，北海道の場合と違い，幼稚園教師に40歳以上の者が¼を占めている．このような現象は，その地域毎の教育に対する考え方，教員全体の年齢構成，私立の場合は設置者の考え方など，様々な条件によって変化するものと思われるが，北海道の場合は久米の結果に比べ，幼稚園には若さが，小学校には年齢が，極めて鮮明に感じられる様である．

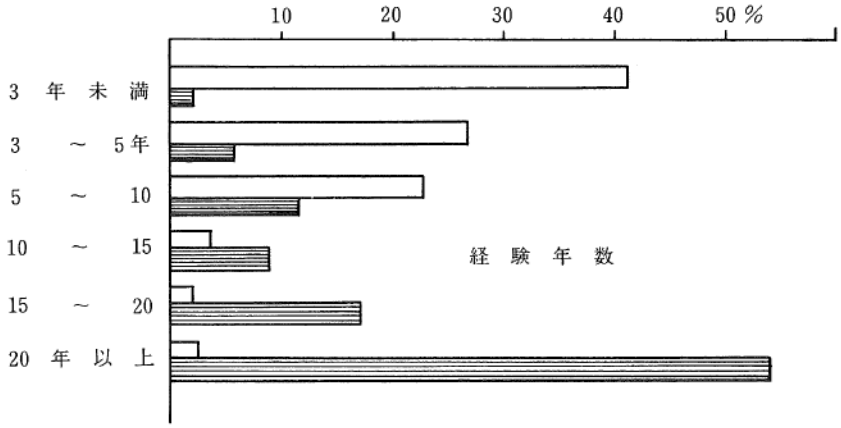



図－1　教師の性別割合

何れにせよ，各年齢層にわたって広く教師を確保し，互いに相補いながら個性を充分に発揮しつつ教育を担当できるような，チームワークのしっかりした教師集団であるならば，特別な言を要し




図－2　教師の年齢構成及び経験年数




図－3　教師の経験年数

ないであろう．

B．小学校教師の目に映る幼稚園教育

小学校は幼稚園教育に冷淡だと言われているが，一体どのように受け止められているのだろうか．幼稚園は，園児の指導記録を子どもの入学する小学校へ送附することを義務づけられている（指導要録抄本を実際に送附している幼稚園は，本調査においては約半数の48.6%である）が，幼稚園出身者についてこの種の資料を揃えている小学校は約3分の1，しかも，このような資料を実際の生活指導に役立てていると回答した教師は，僅か20%しか見当らない．この点は，函館市内のみの公立学校に対する前回の調査とほぼ同様の結果である．特に，この種の資料を有用と思わない，或は資料として不備な面が多いので利用できないとの厳しい指摘も多い(18.2%)．確かに，幼稚園が作った個人記録は，児童の理解に先入観を生じさせる面があることも否めない．又，指導要録には「きれいごとを書き過ぎて子どもの実像との間に違いがあり過ぎる」との指摘は，この種の制度そのものが形骸化する可能性のあることを物語るものではなかろうか．

**表—1**　カリキュラムの検討（小）

| | % |
|---|---|
| a．必要なことなのでいつも検討する。 | 6.63 |
| b．気がついた時に確かめる程度。 | 26.9 |
| c．指導の一環として考えることはない。 | 21.5 |
| d．検討する必要はない。 | 36.5 |
| e．機会があれば検討したい。 | 2.9 |

**表—2**　カリキュラムの検討（幼）

| | % |
|---|---|
| a．学習指導要領などをいつも検討する。 | 0.9 |
| b．　〃　時々　〃 | 26.6 |
| c．検討する必要はない。 | 7.2 |
| d．気になるがその機会がない。 | 58.2 |

さて，これまでの研究によると，幼稚園出身の児童に対し，小学校教師は「教科の先取りをして教えるので，修正に手間がかかる，教科指導がしづらい」など，多くの不満を抱いていることが知られている．これを言う前に，幼稚園におけるカリキュラム，教育内容などについて，どの程度研究しているのだろうか．これに関しては表－1に示す通り．気がついた時に確かめる程度も含めて，幼稚園のカリキュラム等について検討する教師は18%程度である．検討したいも含めた検討なしは75%以上にも達していることがわかる．この点は，幼稚園教師の小学校カリキュラムに対する姿勢とほぼ類似しているように思われる．（表－2）何れにせよ，幼稚園・小学校双方共，様々な理由はあろうが，相互の教育内容について充分な検討が行われているとは言い得ないようである．

ところで，小学校の教師は幼稚園を経てきた子ども達に対して，生活指導や教科指導などの面で

どのような感想を抱いているのだろうか．この点に関する結果を表－5に示す．幼稚園における1及至3年間の生活は，子ども達にとって全く新しい葛藤の場である．その中で過すことは当然，集団生活，社会生活を営むうえで必要な能力，特性を育むことになるのは疑いないところであろう．小学校教師の半数に近い42.7%が，「集団生活に慣れて指導がしやすい」に賛成を表しているのは，このような幼稚園教育の効果に対する正当な評価ではなかろうか．このような社会的特性に関してはこの外，「人前でも話ができる」「基本的生活習慣」「友達づきあい」などの項目にも示されるように，ある程度の評価は受けているように思われる．ただ，子どもは千差万別であるように，それに対する教師の受け止め方も多種多様である．従って，幼稚園出身者のこうした社会的能力・特性に関して，「人づれ」「こましゃくれ」といった評価もあれば，又，基本的生活習慣の自立が出来てない等の，厳しい指摘が多い事も事実である．特に，同一幼稚園出身児が小学校へ行っても，これまでの仲間としか遊べないので困ると言った，全く逆の事例も多い．

社会性に次いで多いのは，同様の調査においては常に指摘される，文字の筆順の問題ではほぼ¼に相当する26.5%の教師が，直すのに苦労すると訴えており，小学校の教科，教材の先取りに対する感想も多く（22.4%），これらの結果は石川（1977），久米（1979），伊藤（1980）等の報告とほぼ一致しているものである．

幼稚園における文字指導は，数と共にかっては大きな論争の種であった．しかし，積極的に小学校の如き指導がなされ，その結果として誤った筆順で覚え込むといった事例は，北海道の場合それ程多くないのではなかろうか．本調査に対し，「小学校へ入学するまでにぜひ身につけさせたい」能力として，文字（ひらかな）が書けることを挙げた幼稚園教師は，206名中僅か1名に過ぎなかったことからも，うかがい知ることができるであろう．

教科の先取りに関しては，例えば音楽，小学校一年生で扱う歌唱教材のほとんどに，すでに幼稚園で取り挙げられ，誤った音程のまま歌うこと，ここでも矯正に手間取ること，又，学習の内容に対する知ったかぶりなど，様々な問題点があげられている．

以上のように，小学校の教師は幼稚園教育の結果（それが全て幼稚園教育の成果かどうか疑わしいが，との条件を付して述べてくれた例も多いが）に対し，好ましい点，好ましくない点で多くの感想を持ち，それぞれの指導に苦労されていることが解る．ただ，例えば文字の筆順や歌唱における音程，知ったかぶりなどの問題がいつまで続き，本人及び他の生徒の学習やパーソナリティ形成にどう影響していくのか，といった，長期的，広範な展望にもとづいての意見を聞けなかっただけに，この点を今後さらに検討すべきである．

c．子どもへの期待

「幼稚園は小学校の予備校ではない」との指摘を，幼・小双方の教師から受けた．教育は絶え間のない営みであり，現在を充実することが未来の発達につながる，との原理に従うならば，現在は全て未来への基礎であり予備である．小学校へ進んでからの子どもの姿を思いながら日々の保育を計画することに，何ら不自然はないものと思う．大切なのは現象ではなく，その内容ではなかろうか．この意味から，幼稚園が子ども達に何を与えなければならないのかを考える時，新入学児の指導で小学校教師がどんな点に苦労し，どんな子どもを望んでいるのかを知ることも又，一つの参考になるものと思う．ここでは，小学校入学までに身につけさせたいと思う（幼），或いは身につけてほしい（小）こと等について，教師達の具体的記述による意見をまとめておく．

小学校教師から，「どんな子どもでも構わない」との意見は残念ながら1つも聞かれなかったが，概略を表－3に示す．小学校教師が求めるものは先ず第一に基本的生活習慣の確立である．衣服の着脱にはじまり，トイレの使い方，手の洗い方から食事に要する時間のかけ方に至るまで日常生活

をスムーズにおこなうための基本的能力だけで37%に達しており，ベテランらしい観察力で注意を向けていることが良く解るようである．

生活習慣に属するものと思われるが，「アイサツ」「発表」など，意志や感情を表現する手段としての言語の確立に対する期待も高く25%を越えている．又，「集団に入って友達と仲良く遊ぶことができる」「集団生活への適応」など，集団の中での生活をスムーズにおこなうための社会性(石川，1977）に対するものが9.1%とこれに次いでおり，これも又，前回の調査結果とおおむね一致するところである．この他には，根気強さ，思いやり，感動の心などの如き，精神面，情緒的側面の8.7%，数唱や文字の続み書きに対する7.4%などが続いている．

表―3　子どもに対する期待（%）

| | 幼稚園 | 小学校 |
|---|---|---|
| 基本的生活習慣 | 16.4 | 36.8 |
| 言語 | 19.6 | 25.3 |
| 社会性 | 14.1 | 9.1 |
| 交通ルール | 0.4 | 2.0 |
| 健康・運動 | 5.8 | 5.4 |
| 教科・知識 | 5.4 | 7.4 |
| 情緒・精神力 | 38.2 | 8.7 |

表―4　幼・小関連への賛否（%）

| | 賛成 | 反対 |
|---|---|---|
| 幼稚園 | 71.23 | 13.89 |
| 小学校 | 58.74 | 21.53 |

このように，小学校教師が入学時の子ども達に求める能力，特性は，身の周りの仕末やことばの使い方，友達づき合いなど，社会性と総称される事項だけで70%を越えている．このことは，学校という社会で生活を営むうえで，このような基本的能力，特性などを教師達がいかに重視しているかを示すものでもあろう．

このような傾向は，幼稚園教師の側にも同じように認められる．表－4によると，入学までに基本的生活習慣・言語・社会性などを身につけさせたいとする意見は，50%を越えていることがわかる．ある程度の生活習慣が身について，集団生活が可能になってから入園する場合が多いとはいえ，個人的生活，社会的生活における習慣の確立を大きな教育目標とする幼稚園においては，当然の結果かもしれない．

さて，幼稚園は情緒的と言われるが，忍耐力，集中力といった情的・精神的側面を身につけさせたいとの意見が40%近くにも達している．中でも「豊かさ」「のびのび」「やさしさ」などというような，かなり抽象的概念も相当の割合に達している．これに比し，小学校教師が頻々指摘する文字，数量，音楽など教科的なものに対する知識・技術への目標は僅か5%程度に過ぎないし，「ひらがなを読み書きできるようにさせたい」との意見は206名中1名のみであった．

このようにみてくると，小学校教師が期待するものと幼稚園教師が目標としているものとの間にはそれ程大きな相異がないように思われる．従って，幼稚園と小学校との間にはかなり明確な関連性が保持されていると言い得るのではなかろうか．課題は，この無意識的な現象を意識化し，体系的に把えていこうとするかどうかの問題であり，これがスムーズに行けば，小学校の教育も一層効率的になるであろう．なお，教科の先取りや誤った教え込み等に関する指摘を，幼稚園の実態から確認することは，今後の課題である．

D．幼・小関連の可能性について

表－4は，関連の必要性に対する意見を大まかではあるが賛成・反対の二つに分類し，幼稚園・小学校のそれぞれについてまとめたものである．何らかの形で幼・小間に意図的な関連を持たせることに対し，双方共半数以上の教師が支持しており，特に幼稚園教師にこの割合が高い．ただ，小学校においては，「就学前教育を終てこないものが1人でもある限り，幼稚園教育を前提とした小学校教育はあり得ない」との意見が，回答者の22%弱あったことは，「平等の教育」を実践しようとの

現れであろう．幼・小関連を考えるうえでは是非解決されねばならない課題の一つである．

次に，幼・小の関連を現行制度のままで実施するとすれば，どのような方法が考えられるだろうか．

小学校教師は「小学校という学校形態に適応する児童を育成する」項目に4割近い者の意見が集中している(表－6)．一方，幼稚園教師の4割以上は，生活形態，指導方法などの面で関連を持たせることを主張し，教育内容・教材のみを取り上げて小学校での教育形態に近づくことを警戒しているようである．

このように，総論的には幼・小関連を支持する声は強いが，具体的な実践方法となれば，それぞれの立場によってなお意見の別れるところも多いように思われる．幼・小の関連に関しては，現在のところ試行錯誤が繰り返されている状況にあるが，実践報告も数多くなされているので，これらの成果をもとにさらに検討を加えていくべき課題である．何れにせよ，幼稚園と小学校とが密接な連絡をとりながら望ましい方法を考えていくべきところであるので，最後に相互の連絡研修態勢について触れておく．

**表－5**　幼稚園出身者に対する感想

| | |
|---|---|
| a．集団生活に慣れているので指導がしやすい。 | 42.7% |
| b．人前でも気おくれせず話ができる。 | 23.2 |
| c．基本的生活習慣がよく身についている。 | 22.4 |
| d．誰とでも仲よく遊ぶことができる。 | 14.5 |
| e．人づれして、指導がしづらい。 | 19.5 |
| f．特定の友達としか遊ぼうとしない。 | 12.0 |
| g．文字の筆順を誤っているので苦労する。 | 26.5 |
| h．きまりを守れない子どもが目立つ。 | 17.8 |
| i．出身幼稚園によって子どもに差がある。 | 21.5 |
| j．教科内容，教材の先取りがあって指導しづらい。 | 22.4 |

函館においては，幼・小連絡協議会の活動が定期的におこなわれていることはすでに報告したところである（伊藤 1980）が，同様な組織が稚内市にもあることが解った．稚内の場合は，幼稚園のみでなく保育所の関係者も含めて相互研修がおこなわれている点，函館よりさらに一歩進んだ状況と言えるかも知れない．こうした活動の結果は，相互の理解を深めるうえで大きな役割を果しているようだが，反面，それぞれに対する批判や不満もあるように思われるので，この点の検討も次回に譲る．

表－7からも解るように，研究会の必要性を認めないと述べているのはほんの僅かに過ぎず，(小

**表－6**　幼・小関連の方法について

| | 小学校 | 幼稚園 |
|---|---|---|
| a．幼稚園が小学校の内容に近づける。 | 5.8% | 1.94% |
| b．幼児と一年生が合同で学習できる内容を考える。 | 4.6 | 9.70 |
| c．小学校が幼稚園の内容に近づける。 | 2.0 | 8.25 |
| d．協力しながら小学校で適応できる児童を幼稚園が育てる。 | 36.0 | 17.9 |
| e．幼稚園における自由な活動をさらに発展できるよう，低学年の教育を改める。 | 3.7 | 24.7 |
| f．小一年に「自由遊び」を設定，遊びを中心にした特別活動を採り入れる。 | 20.7 | 18.4 |
| g．低学年において合科教育をおこなう。 | 20.7 | 11.6 |
| h．内容によっては，幼，小で合同の援業をする。 | 2.9 | 4.8 |
| i．単なる教材の調整だけでなく，生活形態や指導方法なども考える。 | 24.4 | 43.6 |

表―7　幼・小関連の研修会等について，

| | 小学校 | 幼稚園 |
|---|---|---|
| a．相互の教育についてもっと知る機会が欲しい。 | 26.1% | 48.0% |
| b．相互に援業・保育参観のできる体制が欲しい。 | 12.0 | 26.2 |
| c．幼・小関連を研究できるような研究会が欲しい。 | 15.3 | 28.6 |
| d．研究会があって参加し，意見交換をしている。 | 13.2 | 26.2 |
| e．研究会はあるが，参加することはない。 | 2.4 | 0.4 |
| f．研究会は必要ない。 | 3.3 | 0.4 |
| g．幼・保の問題も含め，広い視点から幼児期の教育を見渡せるような研究会が必要だ。 | 38.5 | 41.7 |

に8名3.3%，幼では1名0.4%)，多くの教師は相互の教育全般について知る機会を望み，研究会に参加し或いは参加を望んでいるようである．特に幼稚園の教師は小学校の教師よりもこの問題に対しては積極的な姿勢を現わしている．このような研究会は単に幼稚園教育のみを問題とするのではなく，同じ幼児期の教育を担う保育所をも含めたものでなければ，真の幼・小関連を研究することはできないことは当然のことであり，この項目に対する賛意は，幼・小双方の教師共ほぼ40%が示している．なお，幼・小の関連に関する項目ばかりではないが，貴重な具体的意見を数多く頂いた．この点に関する分析・報告は，機を改めておこなう心算である．

以上で本調査のおおまかな報告を終る．三学期の多忙ななかで，この問題について多くの御意見・御批判を頂いた先生方に，心から謝意を表する次第である．

## 文　献

平井信義（1977）　人格形成と幼児期の保育の重要性について
日本保育学会第30回大会発表論文集 p. 106
石川清治（1977）　幼稚園カリキュラムの重要度についての父母，幼稚園教師及び小学校教師の認知の比較
日本保育学会第30会大会発表論文集 p. 87
久米知典（1979）　幼・小教育の関連について，―その実態調査と一考察―
初等教育資料№375 pp.11～14
舟木和夫（1980）　幼・小関連・幼年期教育
保育研究の進歩，1980年度版，医歯薬出版K．K．
伊藤勝志（1981）　幼稚園と小学校との関連に関する考察
北海道私学教育研究協会研究紀要　第52号．
秋山和夫（1981）　幼・小関連・幼年期教育
保育研究の進歩　1981年度版．医歯薬出版K．K pp.228～233
秋山和夫（1982）　幼・小関連・幼年期教育
保育研究の進歩　1982年度版．医歯薬出版K．K pp.176～181

（本学助教授　函館分校）